巻　頭　言

“環境技術”特集に寄せて

東京大学
生産技術研究所第四部
教授　山本良一

ワイツゼッカーが現実主義者であるとすると，シュミット・ブレークは理想主義者であろうか。ワイツゼッカーはエイモリー・ロビンス夫妻と共著で“ファクター４”を，シュミット・ブレークは“ファクター10”を出版し，世界各国でベストセラーになっている。ワイツゼッカーは，世界的な貧富の格差拡大を是正するために直ちに資源生産性を４倍に高めるべきだと主張している。これに対し，シュミット・ブレークは，地球環境問題の根本的解決のためには，全世界的なマテリアルフローの絶対量を半分に削減（脱物質化）しても，現在のＯＥＣＤ諸国の生活の質を基本的には維持し得るように資源生産性を2050年までに少なくとも10倍以上に高めるべきだと主張している。一方が改良主義的・現実主義的であるのに対して，一方は革命主義的・理想主義的である。しかし2050年に予想される地球人口90億人を養うためにはファクター20の資源生産性の向上が必要だという主張もあり，またファクター10を実現するためには，とにかくファクター４を達成しなければならないので，ワイツゼッカーとシュミット・ブレークのどちらが正しく又は間違っているということではない。

問題は，私たちの直面している地球環境問題の解決には，技術及び社会・経済システムの巨大な変革が必す（須）であるということである。

周知のようにワイツゼッカー教授は，著名な宇宙物理学者を父に，連邦大統領を伯父に持ち，現在はヴッパタール気候・エネルギー・環境研究所の所長として，また社会民主党の国会議員として活躍されている。一方，シュミット・ブレークは，生態毒性学の権威であり，米国の大学に長く滞在した後，OECDの毒性物質の規制の仕事に携わった後，ヴッパタール研究所の副所長として活躍し昨年退職したばかりである。現在はフランス・プロヴァンスに居を構え，ファクター10研究所の所長としてエコデザインのコンサルティングなど幅広い活動のために東奔西走する毎日を過ごしている。ワイツゼッカーは60歳に，シュミット・ブレークは70歳に近い年齢であるが，大変ありがたいことに，筆者は友人として又は弟分として交際させていただいている。お二人と知り合ってまだ３年にしかならないのであるが，知れば知るほど，彼らの地球環境問題の抜本的・包括的解決策の探求とその普及への恐るべき情熱，知的誠実さ，抜群の行動力（ワイツゼッカーのカバンの中には常にルフトハンザ航空のタイムテーブルが入っている），全世界に及ぶ広範な人脈に圧倒される思いである。二人に共通するのは，人類の直面する資源，環境，貧困等の問題を真正面からとらえ，グローバルに包括的に解決していこうという強固な意志である。“今やらねばいつできる，自分がやらねば誰がやる”といった強力なリーダーシップに，筆者のような怠け者は時にはへき（辟）易させられることもあるのだが，そこには近代文明をつく（創）り出したヨーロッパ人の責任感も感じ取れるのである。この前，フランス・プロヴァンスにあるシュミット・ブレークの別荘でロゼワインを飲みながらファクター10クラブのメンバーとパーティーをした時に，つくづくと思ったものである。なぜ日本からは世界を救うコンセプトや理論やモデルが出てこないのかと。

持続可能発展，エコエフィシェンシー，環境管理，ファクター10，脱物質化，エコデザイン，ＬＣＡ・・などどれをとってもヨーロッパがいち早く提唱したものばかりである。しかし，日本民族に創造性が欠如しているわけでは決してないと思うのである。例えば，江戸文化は洗練された“貧乏”文化（脱物質文化）としてもっと世界にアピールしてもよいのではないだろうか。“豊かな”脱物質文明をどう構築するかが21世紀の中心的課題であるはずなのだから。

今年の１月５日にボンでワイツゼッカーに会ったら，国としての日本の資源生産性は欧米より２倍も高く，そのことも一つの理由となってエコロジカルな税制改革を進めていると言っていた。日本人は，もっと自信を持って，広く世界を見て，持続可能発展に突進すべきであると思うのだがいかがであろうか。